王充の典籍批判について

大久保隆郎

一　問題設定の理由と目的

後漢の特異な思想家として注目される王充は、自己の生涯をかけ、二十餘萬言を以つて著わした「論衡」著作の動機を「衆書が實を失ない、虚妄の言が世を覆う事態に對處すべく著わした。」と語つている。

是故論衡之造也、起三衆書並失レ實、虚妄之言勝二眞美一也。（論衡　對作篇　以下篇數のみ記す。）

現行の「論衡」には、衆書に對する批判ばかりではなく、薄葬に關する論[注1]、頌漢に關する論[注2]、性・命に關する論等々、多くの主張が盛られている。しかし、王充自身が「衆書失レ實」ということを「論衡」の著作の動機としていることを勘案すれば、「論衡」の篇章に記される典籍批判の比重はきわめて大なるものと云わねばなるまい。

この論文の目的は、「衆書失レ實」として、王充の論の對象となつた、衆書（典籍）批判の問題を取り上げて、王充の意圖する方向が、頌漢論と密接に關連するものであることを論じ、衆書批判中に取り上げられる天人感應災異說批判が頌漢の意識と連なるものであることを明かにせんとするにある。[注3]

二　典籍批判とその問題點

王充の衆書に對する批判が、最も顯著に表われている「論衡」の篇章としては、次の十七篇を擧げることができる。すなわち、

「書虚」・「變虚」・「異虚」・「感虚」・「福虚」・「禍虚」・「龍虚」・「雷虚」・「道虚」・「語增」・「儒增」・「藝增」・「問孔」・

「刺孟」・「非韓」・「正說」・「書解」・「案書」が、それである。

この中、篇名に「虛」・「增」の文字が用いられている篇を王充は「九虛・三增」と總稱している。「虛」とは、實虛の詮訂を行なう際に用いられる用語であり、「增」とは、衆書に表現された誇張、增飾の意味である。

この論文では、典籍批判として一つの纒りをもつ「九虛・三增」の各篇を中心に論述するが、具體的な問題を檢討するに先だち、これらの篇が、如何なる目的の下に著されたものであるかを、篇章の冒頭の部分を比較することから探り出そう。

世信虛妄之書、以爲載於竹帛者、皆賢聖所傳、無不然之事。……（書虛篇）

傳書曰、宋景公之時……（變虛篇）

殷高宗之時、桑穀俱生於朝……（異虛篇）

儒者傳書言……（感虛篇）

世論行善者福至……（福虛篇）

世謂受福祐者……（禍虛篇）

盛夏之時、雷電擊……（龍虛篇）

盛夏之時、雷電迅疾……（雷虛篇）

儒書言、黃帝採首山銅……（道虛篇）

傳語曰、聖人憂世深……（語增篇）

儒書稱堯舜之德……（儒增篇）

世俗所患、患言事增其實。……（藝增篇）

この十二篇の冒頭の部分を考察する時、「九虛」においては、「書虛篇」、「三增」においては「藝增篇」を除く、他のす

べての篇が、直接に王充の批判の對象となる問題から始まつているのに比し、「書虛」、「藝增」の二篇は、目的意圖を冒頭に配していることがわかる。「九虛・三增」として一括して論じられるものでありながら、「變虛」以下「道虛」・「語增」、「儒增」各篇には見られぬ目的意圖を記す部分が、この二篇に示されていることから、「九虛」と「三增」の目的意圖が、「書虛篇」と「藝增篇」の冒頭に總括されていると云える。

「九虛」において、王充が意圖したものは、賢聖の傳であるとして盲信する虛妄の書、人々の度肝をぬく表現を敢てする諸子傳書に對し、その眞僞を詮訂し、實虛を辨別することであり、「三增」においては、「純樸之事」・「審然之語」が誇張され、傳えられている衆書の眞僞を詮訂し、經典の語の眞意を論ずるにあつたと言える。このことは、次に掲げる例文により、明かである。

世信虛妄之書、以爲載於竹帛者、皆賢聖所傳、無不然之事。故信而是之、諷而讀之、睹眞是之傳、與虛妄之書相違、則幷謂短書不可信用。夫幽冥尙可知、沈隱之情尙可定、顯文露書是非易見。籠總幷傳、非實事、用精不專、無思於事也。夫世間傳書諸子之語、多欲立奇造異、作驚目之論、以駭世俗之人、爲譎詭之書、以着殊異之名。

（書虛篇）

世俗所患、患言事增其實。著文垂辭、辭出溢其眞、稱美過其善、進惡沒其罪。何則俗人好奇、不奇、言不用也。故譽人不增其美、則聞者不快其意。毀人不益其惡、則聽者不愜於心。聞一增以爲十、見百益以爲千、使純樸之事、十剖百判、審然之語、千反萬畔。墨子哭於練絲、揚子哭於岐道、蓋傷失本、悲離其實也。蜚流之言、百傳之語、出小人之口、馳閭巷之間、其猶是也。諸子之文、筆墨之疏、人賢（賢人）所著、妙思所集、宜如其實、猶或增之。倘經藝之言如其實乎。言審莫過聖人、經藝萬世不易、猶或出溢增過其實。增過其實、皆有事爲、不妄亂誤以少爲多也。然而必論之者、方言經藝之增與傳語異也。經增非一、略舉較著、令恍惑之人觀覽采擇、得以開心通意、曉解覺悟。

（藝增篇）

「九虚・三増」の意圖するものが、衆書の眞僞を詮訂し、増・虚を辨別し、その眞意を論ずるにあつたことは、明白であり、本論文で「九虚・三増」を典籍批判の一つの纒りを持つと論ずる由縁も、もはや明白であろう。

次に、この各篇において、王充が、具體的に、いかなる問題を、いかに取り扱つているかを論ぜねばならぬのであるが「九虚」・「三増」に表われた典籍批判の實態を、全て論ずることは、到底、小論のなし得ることではない。從つて「九虚」においては、重點的に記される天人感應災異説批判の具體例を取り上げ、「三増」においては、各篇から拔萃したもののみを取り上げて論述する。

「九虚」中、「變虚」・「異虚」は天變と地異に對する論であり、「感虚」は、人間の精誠が天を感動させ異變をもたらすという感應論の「虚」なることを論じ、「福虚」、「禍虚」は、吉凶禍福の現象を天祐・天罰として、人間の行爲の善惡に結びつけることに對し、人間の命を初生の際の氣の厚薄によつて決するものとの基點から、論ずるものであり、「雷虚」・「龍虚」は、天の實際の行爲としての龍・雷に關するものであり、全て、天人感應災異説と密接に連なる問題を取り扱つているのである。從つて、「九虚」の中心をなすものは、この天人感應災異説の批判であると云い得る。

天人感應災異説において、最も、大きな問題として取りあげられるのは、天變地異に關するものであるが、「九虚」中、天變に關して專らに論じているのは、「變虚篇」であり、地異に關して專らに論じているのは、「異虚篇」である。

「變虚篇」中に取り上げられているのは、「熒惑」の移動に關する問題である。

「傳書曰、宋景公之時、熒惑守(在)心。公懼、召子韋而問之曰、熒惑在心、何也。子韋曰、熒惑天罰(使)也、心宋分野也。禍當君、雖然、可移於宰相。公曰、宰相所使治國家也。而移死焉、不祥。子韋曰、可移於民。公曰、民死、寡人將誰爲也。寧獨死耳。子韋曰、可移於歲。公曰、民饑必死、爲人君而欲殺其民以自治也、其誰以我爲君者乎。是寡人命固盡也。子毋復言。子韋退走、北面再拜曰、臣敢賀君。天之處高而耳(聽)卑。君有君人之言三、天必三賞君。今夕星必徙三舍、君延命二十一年。公曰、奚知之。對曰、君有三善、故有三

賞。星必三徙、三徙二行七星、星當二一年、三七二十一。故君命延二二十一歲一。（省略）。」（變虛篇）

「熒惑」とは、漢書天文志の晉灼の注によれば、「常以二十月一入二太微一、受レ制而出、行二列宿一、司二無道一、出入無レ常也。」というものであり、王充の批判の對象となつた右の傳書における熒惑の問題等、天人感應災異說が主流をなしていた當時において、きわめて重要な問題であつたと云えよう。

この傳書に對して、王充が問題として取り上げるのは、「熒惑天使也。……」・「天之處レ高而聽レ卑」・「君有二君人之言三一、天必三賞君一。」・「君延二命二十一年一。」等々の子韋の言であり、王充は、この言の虛なることを「變虛」全篇をあげて論じている。

「君有二君人之言三一……君延二命二十一年一。」の言に對しては、「三善言によつて二十一年の延命を得たとするならば、百善言では千年の壽を得ることができるかと論駁し、「天處レ高而聽レ卑、君有二君人之言三一……」の言に對しては、「聽」という天の人格性、有意性を表わす語を問題に取り上げ、「虛」なることを實證せんと試みるのである。

「夫天體也。與レ地無レ異、諸有レ體者、耳咸附二於首一、體與レ耳殊、未二之有一也。天之去レ人、高數萬里、使二耳附レ天、聽二數萬里之語一、弗レ能レ聞也。（中略）謂下天聞二人言一、隨二善惡一爲中吉凶上誤矣。」（變虛篇）

天を人格的有意志的實體として把握するならば、當然、人間に具備する諸器官、諸機能を有すべきものとなる。天が「聽」という機能を有するとするならば、人間の聽覺と同樣の物理的限界をも有するという觀點から、「卑きに聽く」という言を否定している。「熒惑天使也。心宋分野也……」の言に對しては、天に熒惑があるのは、王者に方伯のあるごときものであり、禍を他に移すことを、進言した子韋の言を、熒惑が國人に禍を移すことを肯定することはあり得ないといい、その言の虛妄なることを論じ、更に、「熒惑守レ心」ということが、國亡ということの兆であるとするならば、その凶禍を除くことは、決してできないし、ましてや延命ということもあり得ないということを、「人死」の比喩を用いながら論じているのである。

次に、地異の問題を扱つた「異虚篇」について述べよう。

「異虚篇」は桑穀が朝廷に生じたことを國亡の前兆であると占つたことにむけられたものであるが、これは、災異の現象を、政の得失、行の善惡に求める災異説に對する批判であると言える。

殷高宗之時、桑穀俱生二於朝一、七日而大拱。高宗召二其相一而問レ之。相曰、吾雖レ知レ之、弗レ能レ言也。問二祖己一。祖己曰、夫桑穀者野草也。而生二於朝一、意二朝亡一乎。高宗恐駭、側レ身而行レ道、思二索先王之政一、明二養老之義一、興二滅國一、繼二絶世一、舉二佚民一。桑穀亡、三年之後、諸侯以レ譯來朝者六國、遂享二百年之福一。高宗賢君也。而感二桑穀生一、而問二祖己一、行二祖己之言一、修レ成改レ行、桑穀之妖亡、諸侯朝而年長久、修レ善之義篤、故瑞應之福渥。（異虚篇）

天人感應災異説は、云うまでもなく、前漢の董仲舒の出現以來、漢帝國の政治理念の一環をなすものであり、災異は王者に對して、天の譴告を意味するものであつた。かかる思潮においては、熒惑の問題と共に、地に現われるこの桑穀の問題等も、きわめて重要なものであつたと云えよう。この桑穀の問題について、王充が最初に問題とするのは、祖己の「……而生二於朝一、意二朝亡一乎。」という「朝亡」の語である。この「朝亡」に對する批判として、王充はまず、「人死」との關連の上から論ずるのである。

夫朝之當レ亡、猶二人當レ死、人欲レ死、怪出、國欲レ亡、期盡。人死命終、死不二復生一、亡不二復存一。祖己之言レ政、何益二於不レ亡。高宗之修レ行、何益二於除レ禍。夫家人見レ凶、修レ善不レ能レ得レ吉。高宗見レ妖、改レ政安能除レ禍、除レ禍且不レ能、況能招二致六國一、延レ期至二百年一乎。故人之死生、在二於命之天壽一、不レ在二行之善惡一。國之存亡、在二期之長短一、不レ在二改之得失一。……（異虚篇）

「人の死生は、命の天壽にあつて、行の善惡ではないのと同樣、國の存亡は、期の長短にあつて、改の得失によるものではない」と、王充はいうのである。これは、王充の定命論（人間の命は、人間初生の時、氣の厚薄によつて決定されているものであつて、變更できないものという論）と密接な連なりの中にあるものと云える。他に、「桑穀」を凶と判斷したことについて

も、決定的なものではないことを論證し、「轉レ禍爲レ福之言、到レ今不レ實。」という語で結んでいる。

「感虛篇」においては、天人感應論に對する批判が、更に詳細に論述されているが、ここでは、傳書の語を擧げず、感應と見られる現象を王充が、いかに把握したかについて論じよう。「感應篇」では、感應と見られる現象を、偶然に兩者が適合する狀態であると論じている。

猶三白紅太白見三於天一也、變見三於天一、妖出三於人一、上下適然、自相應也。…(感虛篇)

或時城適自崩、杞梁妻適哭。……(同　上)

或時奏三淸角一時、天偶風雨、風雨之後晉國適旱。……(同　上)

「九虛」における天人感應災異說批判は、まだ、かなりの問題を他の各篇の中に殘してはいるが、「變虛」・「異虛」・「感虛」の各篇に表われた傳書批判において、「天」・「人」・「災異」・「感應」に對する王充の基本的觀點はもはや明確である。卽ち王充は、「天」・「人」・「災異」の因果關係を切斷し、「感應」の關係を偶然に一致するものとしたのである。

次に、「三增」各篇の問題を檢討しよう。

「語增」・「儒增」・「藝增」の三篇によつて、構成されるものが、「三增」であるが、「語增篇」は、諸子傳書中の語の增飾に關するもの、「儒增篇」は、當時、王充によつて、儒書として意識された書中の增飾に關するもの、「藝增篇」は、經典(五經)の增飾に關するものである。以下、「三增」各篇ごとに一例を擧げ論を進めよう。

傳語曰、文王飲酒千鐘、孔子百觚。　(語增篇)

この中で、王充が問題とするのは、「飲酒千鐘・百觚」の語である。この問題に關しては、文王・孔子に對する人間像を判斷の基準とし、「飲酒千鐘・百觚」の語は、酒徒の稱であつて、聖德の盛んなことを表わすものではないと次のように論じている。

如二一坐千鐘百觚一、此酒徒、非三聖人一也。飲酒有レ法、胸腹小大、與レ人均等。飲酒用三千鐘一、用レ肴宜レ盡三百千一、百觚則

宜レ用二十羊一。（中略）案二酒誥之篇一、朝夕曰レ祀二茲酒一。此言三文王戒二愼酒一也。朝夕戒愼、則民化レ之。外出二戒愼之教一、內飲酒盡二千鐘一、導レ民率レ下、何以致レ化。承レ紂疾レ惡、何以自別。……（語增篇）

次は、「儒增篇」の一例である。

儒書言、董仲舒讀二春秋一、專レ精一レ思、志レ不レ在レ他、三年不レ窺二園菜一。（儒增篇）

この中で、王充が問題とするのは、「三年不レ窺二園菜一。」の語である。この問題に關して王充は、いかなる賢者といえども、人間である以上、氣の弛緩があり、この表現は、「專レ精一レ思」を强調するの餘りの增飾であると、次のように云つている。

人之筋骨、非レ木レ非レ石、不レ能レ不レ解。故張而不レ弛、文王不レ爲、弛而不レ張、文王不レ行、一弛一張、文王以爲レ常。聖人材優、尙有二弛張之時一、仲舒材力劣二於聖一、安能用レ精三年不レ休（儒增篇）

次は「藝增篇」の一例である。

尙書曰協二和萬國一……（藝增篇）

この中で、王充が問題とするのは、「萬國」の語である。この問題に關して王充は、堯の德政が、諸夏、夷狄をも化したということから、堯の德がきわめて盛んなことを言わんとして、「萬國」と稱したのであるが、實際の國の數は三千にも滿たぬものであると次のように云つている。

幷二合其數一、不レ能二三千一（能猶及也）、天之所レ覆、地之所レ載、盡二於三千之中一矣、而尙書云二萬國一、褒增過レ實、以美レ堯也。欲レ言二堯之德大、所レ化者衆、諸夏夷狄、莫レ不二雍和一、故曰二萬國一。（藝增篇）

以上、「九虛・三增」の各篇において、衆書の實虛を辨別し、眞僞を訂することによつて、天人感應災異說の問題を浮き彫りし、諸子傳書、賢聖の語の矛盾、虛飾を追求した王充の論をたどつて來たが、次に、かかる衆書批判を展開した王充の意識が、頌漢の意識と密接に結合するものであることを論じよう。

三　典籍批判の意圖する方向

一般的な典籍批判と頌漢の意識との關連を論ずる前に、「九虛・三增」における衆書批判と頌漢の意識との關連を明確にしよう。

「九虛・三增」と頌漢の意識との關連を明確に確すのは、「論衡」中の「須頌篇」に記される次の一節である。

漢有二實事一、儒者不レ稱。古有二虛美一、誠心然レ之、信二久遠之僞一、忽二近今之實一。斯蓋三增九虛所二以成一也　（須頌篇）

「須頌篇」は、王充の頌漢論を總括するものであり、頌漢に關する各篇章が、古を尊重し現今を卑下し、漢德を稱さぬ、いわゆる復古論者に對し、大漢の德を稱揚し、漢の世の太平の治を後世に傳達せんとするものであることを論じているものであるが、右の例文は、その中の一節である。

ここで注目すべきことは、「九虛・三增」の成立が、實に頌漢の意識の下に生みだされたものであることを明言していることである。「九虛・三增」の各篇において、諸子傳書の語の批判を、きわめて意欲的に、執拗なまで繰り返えす、その意圖は、「近今」の實を忽かにし、「古」の虛美を信奉する人々への批判であり、「近今」の實を强調し、漢の世を頌せんとするものであつたのである。

この「九虛・三增」の意圖する頌漢の方向と、他の篇章に記される典籍批判とは、いかに關連するであろう。この問題を考察するとき、この間の關連は逆に、「尙今」という共通の路線に導びかれ頌漢の意識と密着するものと云うことができるのである。このことは、次に示す例文により、明白となる。

世信二虛妄之書一、以爲載二於竹帛一者、皆賢聖所レ傳。無不然之事上、諷而讀レ之、睹二眞是之傳一、與二虛妄之書一相違、則幷謂二短書不レ可二信用一……　（既出　書虛篇）

世儒學者、好信レ師而是レ古、以爲二賢聖所レ言皆無レ非、專精二講習一、不レ知二難問一。夫賢聖下レ筆造レ文、用レ意詳審、尙未レ可レ謂二盡得レ實、況倉卒吐レ言、安能皆是。不レ能二皆是一……　（問孔篇）

夫俗好珍レ古不レ貴レ今、謂二今之文不レ如二古書一。夫古今一也。才有二高下一、言有二是非一、不レ論二善惡一而徒貴レ古、是謂二古人賢一、今人一也。

（案書篇）

（この付點の部分を相互に勘案すれば、重なり合う問題を導びきだすことは容易である――私注――）

これらを頌漢論の一篇である「齊世篇」の次の語と照合すれば、王充の典籍批判の意圖するものが、頌漢の意識と完全に一致するものであることは、動かし難いものとなろう。

世俗之性好褒レ古而毀レ今、少レ所レ見而多レ所レ聞、又見二經傳增二賢聖之美一、孔子尤大二堯舜之功一、又聞二堯禹禪而相讓、湯武伐而相奪一、則謂下古聖優二於今一、功化渥中於後上矣。夫經有二褒增之文一、世有二空加之言一、讀レ經覽レ書者所二共見一也。

（齊世篇）

この中の「世俗之性好褒レ古而毀今。」の語は、「案書篇」の「夫俗好珍レ古不レ貴レ今」という語や、「徒貴レ古」、「問孔篇」の「是レ古」という語等に密着し、「褒增之文」は、「三增」に記される「增」の語に通じ、「空加之言」は、「九虛」の「虛」に相當し、又「正說篇」に記される「空生二虛說一」という語、又は、「書解篇」に記される「各以二私意一分二析文字一。」等に相當するものと云える。

これを要するに、「問孔」・「非韓」・「刺孟」各篇における、いわゆる聖賢の書に對する批判、「案書」・「正說」・「書解」各篇での當時の書、又は五經に關する論議等々は、全て「近今」の實を稱揚せんとする頌漢の論に連なるものと言える。

王充の典籍批判は、實に、王充の生きる時代を肯定し、稱揚せんとする意圖の下に提出されたものである。彼は明かに、古の聖賢の書として信奉し、古に拘泥する人々に對し、各種の典籍の實虛・眞僞を詮訂し、辯別することによつて、典籍に記された虛美を明確にし、現實の世に眞美の存することを訴えんとしたのであり、彼のこの典籍批判は、頌漢の目的意識の下に見事に統一されているのである。

この現實を肯定し、稱揚せんとする王充の意識は、いかなるものに培養されたのであろうか。

ここに考えられるものは、現實の歴史的認識と中國の傳統的な知識人としての自負ということである。

歴史の進展に伴つて、次第に領土を擴大し、經濟生活の發展は、人間の生活を豊なものにし、匈奴の侵入に脅された時代は、四夷朝貢する時代と變る。封建制の上昇期の過程にある漢の世は、古に比すべくもなく繁榮し、興隆する社會であり、その統治者として君臨する皇帝は、古に比して、卑賤の身より起こり、その力によつて威を海内に示す人間皇帝であつた。かかる王充の歴史認識は、次に示す例に明かである。

周時僅治二五千里内一、漢氏廓レ土收二荒服之外一。牛馬珍二於白雉一、近屬不レ若二遠物一。古之戎狄、今爲二中國一、古之躬人、今被二朝服一、古之露首、今冠二章甫一、古之跣跗、今履二商舄一。（宣漢篇）

戎狄攻レ周、平王東走、以避二其難一、至レ漢四夷朝貢。（恢國篇）

五代之起、皆有二因緣一、力易レ爲也。高祖從二亭長一提二三尺劍一、取二天下一、光武由二白水一奮二威武一。海内無二尺土所レ因、一位所レ乘、直奉二天命一推二自然一。（同　上）

この歴史認識は、時代に生きる人間として、その歴史的位置を肯定し、高揚せんとする意識であるが、かかる歴史認識は、相反する歴史觀と對立することにより、自己の歴史觀が事實に基くことから、更に强調されるものとなる。

王充は歴史的發展の事實を正確に把握した。しかし、歴史を通して見れば、漢の世は、繁榮し、興隆する時代であるに拘わらず、時代は王充と相反する復古的歴史觀の下に展開されていたのである。

繁榮する洛陽の都で學び、百家の言に通じた（後漢書王充傳）王充にとつて、現實に彌蔓する惡弊は、歴史を逆轉させる大きな力であり、そこに王充は、歴史の危機を發見するのである。このことは、次に示す「論衡」著作の動機を記す「對作篇」の中に、縷縷述べられている。

孟子傷二楊墨之議大奪二儒家之論一、引二平直之說一、褒レ是抑レ非、世人以爲レ好レ辯。孟子曰、予豈好レ辯哉、予不レ得レ已。今吾不レ得レ已也。虛妄顯二於眞一、實誠亂二於僞一、世人不レ悟、是非不レ定。紫朱雜廁、瓦玉集糅。以レ情言レ之豈吾心所二

能忍一哉。衞驂乘者越レ職而呼レ車、惻怛發レ心、恐二土(上)之危一也。夫論說者、閔レ世憂レ俗、與二衞驂乘者一同二一心一矣。愁二精神一幽二魂魄一、動二胸中之靜氣一、賊レ年損レ壽、無レ益二於性一、禍重二於顏回一、違二負黃老之敎一、非二人所レ貪、不レ得レ已故爲二論衡一。

（對作篇）

孟子のことばを引きながら、「吾已むを得ざればなり。」という王充の語に、歷史の危機をとどめんとする意識と、知識人王充の危機意識とが結晶しているのである。反歷史觀によつて齎らされる虛妄・虛僞の現實「是非不レ定」・「紫朱雜廁」・「瓦玉集糅」する混沌の現實に、王充は叫ばずにはおられなかつたのである。

なお、知識人としての王充は、賢者に名を借りて自己の胸中を吐露している次の語に明かである。

故夫賢人之在レ世也、進則盡レ忠宣レ化、以明二朝廷一、退則稱レ論貶レ說、以覺二失俗一、俗也、不レ知レ還、則立道輕爲レ非、論者不二追救一、則迷亂不二覺悟一。

（對作篇）

賢者の行爲、知識人としして、當然、果さねばならぬとする「進則盡レ忠宣」化、以明二朝廷一、退則稱レ論貶レ說以覺二失俗一」という意識は、王充の抱く賢者のイメージであると同時に、知識人王充自身でもあつたと云える。このことは、次に示す「對作篇」の語によつて、更に明白であろう。

論衡九虛三增所四以使三俗務二實誠一也

（對作篇）

（この「使三俗務二實誠一」の語は、前の「以覺二失俗一」の語と密着するものである。――私注――）

從つて、王充の頌漢の意識は、眞實の歷史認識の下に生まれ、反歷史觀の生みだす虛妄、混沌の中に忍びこむ歷史の危機に對し、中國の傳統的知識人としての自負の下に批判を、展開したものであると云うことができる。

四　結　語

本論文は、「論衡」における典籍批判が、窮極において頌漢の意識に密着するものであることを論じて來たのであるが、「九虛」における批判の對象が、前漢以來、政治理念として中核を形成していたと考えられる天人感應論におけられてい

るということと、頌漢とがいかに結びつくのであろうか。

この問題は、天人感應災異說に內包する矛盾と、王充の歷史觀を解明することによつて明白となる。

先ず、天人感應災異說に內包する問題から檢討しよう。

董仲舒の言（漢書本傳）によれば、災異とは天によつて示される譴告を意味するものであり、王者の失政に對し、天意が災異として現われるものであつた。

王充は、この災異說を批判することにより、天と王との感應の關係を切斷し、王の爲政と災異とを完全に斷絕せんと試みたのである。王充によれば、變異は人間の行爲の善惡によるものではなく、變異は變異として、人間の行爲とは、全く異つた場に存するものであつた。從つて、變異現象を以つて、人君に責を歸することは、徒に、人君を惑わすものであつた。かくして、天と結合することによつて、爲政者の權威を計らんとした天人感應災異說は王充によつて鋭くその矛盾をつかれたのである。このことは、次の文が明白にしている。

故危亂之變至、論者以責二人君一、歸二罰於爲政不レ得二其道一。人君受以自責、愁神苦思、撼二動形體一、而危亂之變終不二滅除一、空憤二人君之心一。（治期篇）

天人感應說を執拗なまでに批判する「變虛」以下、「雷虛」の各篇の展開は、人君と變異の因果關係を否定することによつて、人君から災異の呪縛を解かんとすることにあつたと云えよう。王充によれば、いかなる災變も、天意を示すものではなく、王者の行爲とは、全く無關係なものであり、後漢書五行志に記される天變地異等も、王者の聖德の稱とはなんの關係もないものであつたと云うことができる。

次に、王充の歷史觀の問題から論じよう。

王充の歷史觀は、史實に基づいた發展的歷史觀であつた。しかし、王充の時代において、社會の主流をなすものは、王充から見れば、復古的歷史觀であつた。この歷史觀の新・舊の相違は、價値觀の相違であり、世界觀の相違である。「舊」

の世界觀は、天人感應を基軸として構成され、「新」の世界觀は、非合理な天人關係を切斷し、人間を中心として構成されるものであつた。例えば、「命」を、人間自身の手に取り戻し、天の關與を斷つたことなどがそれである。かかる「新」の世界觀は、「舊」の世界觀との對立によつて、徹底した批判の型をとるのである。王充が、天人感應災異說の批判を繰り返すのも、現實の歷史認識の下に「舊」世界觀の虛妄を、その中に認めるからに他ならず、換言するならば、現實の優越を認め、現實を稱揚せんとする、いわゆる頌漢の意識の强調に他ならぬものと云える。

注1　王充の薄葬論に關しては、拙稿「王充の薄葬論について」函館人文學會「人文論究」二十六號を參照されたし。

注2　頌漢論に關しては佐藤匡玄博士の論文に詳しくとりあげられているが、「論衡」中に、直接、頌漢をとなえている篇名としては、「講瑞」、「指瑞」、「是應」、「治期」、「齊世」、「宣漢」、「恢國」、「驗符」、「須頌」の各篇がそれである。

注3　論衡研究は、從來、天人感應批判と頌漢という矛盾するものを持つと、いう觀點の上で分析・解剖されてきたものである。つまり、唯物論的思考（いわゆる被統治階級の立場）と頌漢・定命等の間に矛盾を認め、この矛盾を解明することが問題となつていた。私の主張も、かかる研究の成果を吸收しているものであることはいうまでもない。

なお、引用文は、「論衡集解」（劉盼遂著）、「論衡校釋」（黃暉撰）によるものである。

（大學院博士課程）

次號原稿募集

下記により次號第二十六號の原稿を募集いたします。
振つて御應募下さい。

一、締切　昭和四十二年一月末日
一、枚數　四百字詰原稿用紙三十枚以內
一、採否　委員會に御一任下さい